

西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.63 2010年11月号

松下電器（現 パナソニック）の創業者である故 松下幸之助さんを塾長とする松下政経塾といえば、政界や財界に多く人材を輩出してきたことで有名です。この塾での多くの教えの中で、松下さんは敵をほめるということについておもしろいことを言っています。

「ぼくは、競争相手の企業をくさしたことは一回もない。『ああ、この品物よろしいな。それ（のいいところ）もちゃんとこの中（自社製品）に入ってます』といって、相手のいいところを取り入れてちょっと味付けを変えてやるのだと言います。さすが、松下ならぬ「マネシタ」と揶揄されただけのことはあります。ただ、このエピソードの重要なところは単に物真似をすすめていることではありません。

松下さんは、いろいろな人がもっているアイデアの悪いところや間違っているところを指摘するよりも、そのアイデアのいいところをもらえばいいじゃないか、と言っています。他人の悪いところや間違っているところを指摘することによって、そこに気付いた自分という人間がいかにも優れているかを誇示するよりも、どんな人の言うことも一応は素直に聞いて、いいなと思ったらそれを実行すればいいだけなのに、その難しくないことを人はなかなかできないと言います。

また、政治家の塾生に対して松下さんは次のように言っています。「違う政党の考え方にもいいところはあるやろ。それをもらったらいいのに、党が違うから（なんでも）反対するのは（中略）損やと思うんや。」松下さんに言わせると、「××党のおっしゃっているこの点は正しいのでぜひやってください。でも、わが〇〇党のこういう点はまた違った味でおいしいですよ。さあおあがりなさい。」という選挙演説があってもいいのに、他の政党をくさしているうちは日本の政治はよくなるらない、となかなか厳しいことを言っています。

そういえば、現役の国会議員さんの中には松下政経塾出身の方が数多くいたと思いますが、こうした松下さんの教えを忠実に守っている人ははたしてどれほどいるのでしょうか。おっと、これも「くさし」になってしまいますね。

